

題名「西部の男」から

「西部」の名前が出てくると、大荒原に幌馬車が走り回り、騎兵隊とインディアンとの銃撃戦の西部劇を思い出すが、この映画は静かな動きで、映画全体にユーモアが散りばめられ、ゲイリー・クーパーが地味に振舞っているのがよいし、悪役判事のウォルター・ブレナンも、どこか憎めなく勤善懲悪でないすばらしい作品だと感じた。

【ゲイリー・クーパー出演推奨映画】（出展：フリー百科事典）

- 1901年5月7日ー1961年5月13日（60歳）
- 1936年『平原児』
- 1940年『北西騎馬警官隊』
- 1941年『ヨーク軍曹』アカデミー主演男優賞
- 1943年『誰が為に鐘はなる』
- 1945年『無宿者』
- 1951年『遠い太鼓』
- 1952年『真昼の決闘』アカデミー主演男優賞
- 1954年『ベラクルス』
- 1957年『昼下がりの情事』

【1950年代は西部劇の黄金期】（日本で上映された本数）

1950年＝21本、51年＝43本、52年＝37本、53年＝35本、54年＝37本、55年＝26本、56年＝35本、57年＝51本、58年＝59本、59年＝40本。50年代は、アメリカで同時代に製作された作品だけではなく、戦争で輸入されなかった戦前の作品も公開され、それにリバイバル作品が加わり質・量ともに日本では西部劇全盛期といってよいでしょう。 S・N

ロイ・ビーンの魅力

1940年製作のこの作品が日本で公開されたのは1951年。当時、西部劇は子供たちに大人気で、私も相当多数の作品を観たはずなのですが、この作品は記憶がなく、今回、中学校時代に観た懐かしい西部活劇をもう一度のつもりで観ました。

砂塵が舞う町、酒場、縛り首、牛の群れ、焼き打ち、ガン・ファイト……と、西部劇のお膳立ては揃っていましたが、予想したような西部活劇ではなく、「相変わらずカッコはいいが、結構要領よく立ち回る正義漢とは言えぬ自称流れ者のクーパー」、「自ら独善的に決めた法のもと、強引に町を仕切り、無法者たちにも恐れられ、不思議な秩序を町にもたらす悪徳判事のブレナン」、「明らかに敵対関係にあるクーパーとブレナンの間に流れる友情ともいえる微妙な感情の交流」……。さすがワイラー監督と言うべきか、西部開拓時代の南部の小さな町での西部の男の生きざまを、骨太くあっさり描いた一風変わった西部劇でした。

私は子供のころからクーパーの大ファン（15～6作品は観ています）で、この作品でもクーパーがお目当てでしたが、観終わった後はブレナン扮する悪徳判事ロイ・ビーン、あの何ともいえない眼差しと表情が脳裏から離れず、この作品はミーハーな悪徳判事ロイ・ビーンと、彼をこの上なく巧みに演じたウォルター・ブレナンのための映画だったんだと納得せざるを得ませんでした。

この作品に纏わる話題を追加します。

①この作品でブレナンは1936年の『大自然の凱歌』、1938年の『Kentucky』に引き続き、見事3度目のアカデミー助演男優賞を獲得しています。

②ロイ・ビーン判事（1825年-1903年）は実在の人物で、彼が雑貨屋と酒場を営んでいたのはテキサス州の西部、エドワーズ高原に位置するバルベルデ郡のペコス川西地域。周辺は1936年、テキサス州歴史史跡登録の指定を受け、その昔ビーンが使っていた建物はテキサス州観光局に展示されており、ビーンとその息子は、郡庁所在地デル・リオ市のホワイトヘッド記念博物館敷地に埋葬されているということです。

③悪名高いロイ・ビーンがまるで女神のように崇拜し、彼が経営する酒場にポスターを張るだけでは飽き足らず、町の名をラングトリーと名付けた女性の「リリー・ラングトレイ」も実在のイギリス出身の女優です。ロイ・ビーンは彼女のアメリカ公演のたびに花を届けたそうですが、生涯彼女に会うことはなかったようです。

④ビーンについては、今回の『西部の男（1940年）』の後も、1956年の全国ネットテレビドラマ『ロイ・ビーン判事』（エドガー・ブキャナン主演）、および1972年の映画『ロイ・ビーン』（ジョン・ヒューストン監督、ポール・ニューマン主演）の2作品が製作されています。 K.M.

字幕 戸田奈津子

洋画ファンなら、すぐわかる名前だと思います。エンドロールの最後に、「字幕 戸田奈津子」の名前をたびたび見たことのある方も多いと思います。戸田奈津子氏は清水俊二氏に師事し、1970年代から年間50本のペースで字幕翻訳をこなした時期も有り、携わった洋画は恐らく1,000本を超え、「字幕の女王」と呼ばれています。私が観た映画にも、『タイタニック』『スターウォーズ』『シンドラーのリスト』など、戸田奈津子訳の作品が沢山あります。

字幕は、俳優の演技に加えて、翻訳の善し悪しで、映画からの感動の受け方を左右する大きな要素だと思います。字幕映画の誕生は、ゲイリー・クーパーが主演した『モロッコ』（日本公開1931年）が最初の映画でした。日本以外の国では、外国語映画は、吹き替え版が主流です。当初、ハリウッドで日本向けに、吹き替え版を製作しましたが、吹き替えに関わった日系二世に広島出身者が多く、広島弁の作品になってしまいボツになりました。この後に、日本人の識字率が高いことから、字幕が採用されたというエピソードもあります。

当時、字幕を採用するために、表示場所や文字数などの表示ルールを研究しましたが、その時、最も標準的な日本人の代表として、新橋の芸者さんたちに字幕付き映画を見て貰って、1秒間に何文字読めるのかをテストしたそうです。その結果「スクリーンの右側に1行10文字までを2行まで」と云うルールと1秒間に3～4文字のスピードが基準となりました。その後、ピスタ・サイズやシネマスコープ・サイズの映画が出現し、スクリーン下部に横書きをするようになりました。

（参照：「字幕の花園」戸田奈津子著、集英社発行） a u

2013.6.20
vol.24

『西部の男』

シネマ・ド・りぶらの
コラム・ド・シネマ

シネマ・ド・りぶらの映画講座1のご案内

講師：小島一宏さん

東海ラジオパーソナリティー／大同大学准教授

オードリー・ヘプバーンが輝いていたワケ

“スクリーンの妖精”と謳われたオードリー・ヘプバーンが亡くなって、今年で早や20年が経ちました。しかし今なお、彼女は世界中で愛されています。その愛らしさや美しさは、きっと“見た目”だけではありません。オードリーがどんな人生を生きたのか。彼女の根底に何があったのか。名作・代表作の数々も振り返りながら、オードリーが輝いていたワケを探ります。



★日 時 **8月8日（木）**
14:00～15:30

★場 所 **会議室 103**

★定 員 **60人**

★参加費 **500円（当日徴収）**

★申込み **7月25日（木）から電話で受付**
市民活動センター 0564-23-3114

○東海ラジオ『小島一宏 一週間のごぶサタデー』
（土曜9:00～11:00）パーソナリティー

○毎日新聞『芸術食堂』新作映画コラム執筆
（毎月第2・第4水曜日掲載）

○毎日文化センター講師
『名画からのメッセージ 新旧シネマ鑑賞のツボ』

○栄中日文化センター講師
『わかる！身につく！伝わるトーク術』

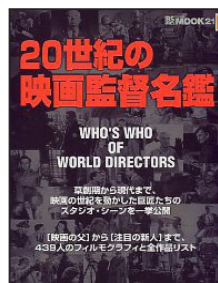
『西部の男』
フィルムデータ

原 題：The Westerner
製作年：1940年
制作国：アメリカ
上映時間：100分 モノクロ

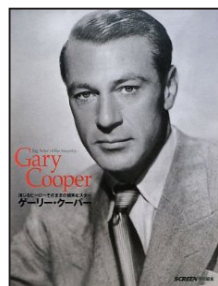
監督：ウィリアム・ワイラー
脚色：ジョー・スワーリング、ナイヴン・ブッシュ
音楽：ディミトリ・ティオムキン
出演：ゲイリー・クーパー、ウォルター・ブレナン、ドリス・ダヴェンポート、フレッド・ストーン、リリアン・ボンド

りばらサポータープロジェクト 「シネマ・ド・りばら」
『西部の男』 関連図書案内
& DVD

監督・主演



N778.2 共同通信社
『20世紀の映画監督名鑑 (Mook21)』



778.253 近代映画社
『ゲーリー・クーパー
演じるヒーローそのままの誠実なスター』



N 778.2 佐藤忠男 晶文社
『映画俳優』

N 778.2 毎日新聞社
『20世紀の大スター 100選』

N 778.2 近代映画社
『20世紀のグレートスター
100 & 外国映画』



字幕

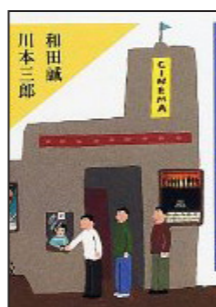
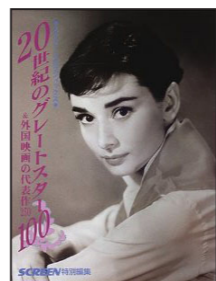


778.253 戸田 奈津子 集英社
『字幕の花園』

778.04 戸田 奈津子 WOWOW
『スクリーンの向こう側』

The other
side
of
the Screen

エッセイ



778.04 和田 誠 文芸春秋
『今日も映画日和』

778.04 田辺 聖子 文化出版局
『セピア色の映画館』

778.04 立川 談志 央公論新社
『談志映画噺』

778.04 高井 英幸 角川書店
『映画館へは、麻布十番から都電に乗って。』



西部劇

778.2 芦原 伸 日本放送出版協会
『西部劇を読む事典』

N 778.2 逢坂 剛 新書館
『大いなる西部劇』

N 778.2 逢坂 剛 新書館
『誇り高き西部劇』

253 スコット・スティードマン 三省堂
『アメリカ西部開拓史』

778.253 井上 一馬 新潮社
『アメリカ映画の大教科書 上』

778.253 G・N・フェニン 研究社出版
『西部劇
サイレントから70年代まで』

アメリカ映画

N 778.2 八尋 春海
『映画で学ぶアメリカ文化』

N 778.2 岩本 裕子 メタ・ブレーン
『スクリーンに投影されるアメリカ』

778.2 植草 甚一 晶文社
『シネマディクト』の映画散歩 アメリカ編』

914.6 足立 康 慶応義塾大学出版会
『雑記帖のアメリカ』

